

平成30年度 東京藝術大学大学院 美術研究科 先端芸術表現専攻
修士課程

入学者選抜試験 第一次試験問題

問題

昨年(2017年)は、現代美術のオリンピックと称される5年に一度のドクメンタ、10年に一度のミュンスター彫刻プロジェクト、さらには2年に一度のヴェニスビエンナーレやリヨンビエンナーレ等々、数多くのアートイベントが行われ、20年に一度と言われる大きな盛り上がりを見せました。

近年、日本でもビエンナーレやトリエンナーレが地域振興や観光開発の名目で各地で行われるようになり、芸術と社会の結びつきに新たな関心が持たれるようになっていきます。

しかしその原点とも言えるドクメンタの始まりを振り返ると複雑な思いにとらわれます。もともとドクメンタはナチスの負の遺産の検証の場としてスタートしました。初回のドクメンタは1955年に148作家による570点の作品が出品され、ドイツ最大の近現代美術展となりましたが、この試みは「頹廢美術」としてナチスに貶められた20世紀美術の汚名をそそぎ、正当な評価を与えるべく組織されたものでした。

ドクメンタは以後、回を重ねるごとにドクメンタ有限会社の設立、現代美術に作品限定、キュレーターの開祖ハロルド・ゼーマンの参加、ヨーゼフ・ボイスによる会場内の自由国際大学設置や「社会彫刻」のアピール、観客数75万超えや予算規模の拡大…そして14回目の昨年は初めてアテネとカッセルの二会場制となり、移民やテロ、貧困や飢餓、性差別やポピュリズムなど世界を襲う緊急課題にアートがどう向き合うべきかの多様な実験が示されました。

ドクメンタの歴史を辿ると20世紀から21世紀へ、アートの様相が大きく変容していることに気づきます。つまり芸術と社会の関係の変化がその足跡に刻み込まれているのです。それはアーティストが時代の変動と共に社会的な存在として目覚め、より協働的で、共創的になろうとしていると言っているのかもしれない。

このような視座に立ち、芸術と社会の関係が様々に模索されているこの時代に、これまでの自分の制作・研究を振り返りながら、今後の自己の活動をどのように展開してゆくべきかを1000字以内の文章で記しなさい。

(※タイトルを自由に設定し、その後ろに具体的なサブタイトルを加えること。
例「共感のアート -いかにして人と人を結びつけるか-」など)

※この問題用紙は試験終了後に回収します。

※記述にあたっては日本語、縦書きで書くこと。

※文字数は1000字以内とする。